中心・偶発学習課題を用いた虚記憶の検討

ソースモニタリング指示を用いた検討

○中山友則

(中央大学)

キーワード：虚記憶，中心・偶発学習課題，ソースモニタリング指示

The influence of source monitoring instruction on false memory using intentional/incidental learning task.

Tomonori NAKAYAMA

(Chuo University)

Key Words: false memory, intentional/incidental learning task, source monitoring instruction.

目 的

事後情報効果や DRM パラダイムを用いた際に見られる虚再認、虚再生のように、実際に経験していないことを、実際に起こったこととして思い出すことや、実際に経験したこととは大幅に異なって思い出すことを虚記憶と言う(Roediger & McDermott, 1995)。虚記憶研究では虚記憶の生起メカニズムを検討するとともに虚記憶を減少させる方法の検討も必要である。Lane, Roussel, Vila, & Morita (2007)から、事後情報効果に関しては、記憶テスト直前にソースモニタリングを促進するために学習時の文脈について詳細に思い出すように指示を行うことで事後情報効果が減少する可能性が示されている。また、この結果は中山(2011)においても追認されている。しかしながら、この指示を DRM パラダイムに応用した中山(2013)では指示を行うことで虚再認が増加した。この結果から、事後情報効果に有効な指示が DRM パラダイムでは不利になることが考えられる。一方、この指示は学習時の文脈に注意を向けさせるものであり、検索時ではなく符号化時に適用することも可能と考えられる。そこで本研究では、記憶テスト直前ではなく、学習直前に指示を行うことで指示が DRM パラダイムにおける虚記憶に及ぼす影響を検討する。

方 法

実験参加者 大学生 66 名が実験に参加した。

実験計画 2 (指示の有無) × 2 (リストの種類: 意図学習, 偶発学習) の 2 要因混合計画であった。第 1 要因が被験者間要因, 第 2 要因が被験者内要因であった。

材料 DRM パラダイムで用いる単語リストは宮地・山(2002), 星野(2002)より 8 リストを選定した。1 リストは 15 単語で構成され, リスト語と非常に関連が深い対応する CL 語が存在した。8 リストは 4 リストずつ意図学習リスト, 偶発学習リストに分けられた。

手続き 集団実験であった。実験開始前には単語リストの記憶実験であると指示した。最初の学習段階では意図学習リストの 60 単語と偶発学習リストの 60 単語を 2 秒間隔で対呈示した。意図学習リストの単語については, 単語の下に★マークが付けられていた。参加者には, ★マークのついている単語は出来る限り記憶し, ★マークのついていない単語については無視するように指示した。この時, 指示有条件の参加者には, 学習時の文脈を共に覚えることを要求した。ここでの学習時の文脈とは, 項目の順番, 対呈示であることから呈示の際の左右の位置, その当時に考えた事等の認知操作, そして★マークの有無である。これらを全てではなく, 何か 1 つでも共に覚えると, 後に思い出せる可能性が高まると指示した。特に★マークの有無は大きな手がかりになると伝え, 活用するように伝えた。単語リスト呈示後は妨害課題を 2 分間行い, その後再生テストを実施した。参加者には★マークの有無に関係なく, 学習時に呈示された単語をできる限り思い出すように指示した。再生時間は 5 分間とした。

結 果

学習時に呈示された単語を再生した場合を正再生とし, CL 語を再生した場合を虚再生としてカウントした。正再生率, 虚再生率の平均値を Table 1 に示した。正再生率に対して 2×2 の分散分析を行ったところ, 学習リストの主効果のみ有意であった [$F(1,64)=1149.34, p<.01, \eta_p^2=.95$]。意図学習リストの正再生率が高かった。同様に虚再生率に対して 2×2 の分散分析を行ったところ, 交互作用が有意であった [$F(1,64)=7.66, p<.01, \eta_p^2=.11$]。単純主効果検定を行ったところ, 意図学習リストにおける指示の有無の単純主効果が有意であった [$F(1,64)=7.66, p<.01, \eta_p^2=.11$]。虚再生率は指示あり条件で有意に低くなった。

Table 1 means (SDs) of correct and false recall rate

	Correct recall		False recall	
	intentional	incidental	intentional	incidental
control	.44 (.09)	.01 (.01)	.39 (.21)	.00 (.00)
instruction	.41 (.11)	.00 (.01)	.24 (.22)	.00 (.00)

統制条件, 指示あり条件におけるリストの種類の単純主効果も有意であった [$F(1,29)=99.94, p<.01, \eta_p^2=.78$; $F(1,29)=44.16, p<.01, \eta_p^2=.56$]。いずれも, 意図学習リストの虚再生率が有意に高くなっていた。

考 察

本研究は, ソースモニタリングを促進する指示を単語リスト呈示直前に行うことで DRM パラダイムにおける虚記憶に及ぼす影響を検討した。その結果, 正再生率については指示の影響は見られなかったものの, 虚再生率においては指示を行うことで減少させることが可能であった。ソースモニタリングを促進する指示とは, 単語が呈示される際の文脈に注意を向けさせるものである。この指示により, 単語そのものだけでなく, 手がかりを含めて符号化させることになる。CL 語は学習時に非呈示であるためそうした文脈情報が欠如することになる。これは再生時に手がかりが他の情報と比べて少ないことを意味し, それが虚再生率を減少させた原因と考えられる。しかしながら, 指示を行っても一定の虚再生が生じているため, 虚記憶を防ぐまでの効果は望めない。今回は符号化時には指示を行ったが, 検索時にはその学習時の指示を伝え直すことなく, 文脈情報の活用を促すようには指示していない。学習時に単語と共に覚えた文脈情報を活用させるために, 検索時に再度の指示を行うことも考えられる。また, 今回は中山(2013)に基づいているが, 指示のタイミングを記憶テスト直前から学習直前, 記憶テストを再認から再生と 2 つの点で異なっている。指示の有効性を示すためには, 再認における学習直前の指示の影響や再生におけるテスト直前のみの指示の影響を検討することが必要である。

(Tomonori NAKAYAMA)